

記念講演

貞観の大地震と多賀城復興

講師 前東北歴史博物館長

進藤 秋輝

## 演題 『貞観の大地震と多賀城復興』

【はじめに】地震頻発の9世紀

西暦年	地震の内容	西暦年	地震の内容
800	富士山噴火 足柄路を廃し箱根路	863	越中国大地震 山崩壊、死者多数
818	坂東六国地震 山崩壊、谷埋没	864	富士山噴火 富士五湖
827	平安京大地震 屋舎多数転倒	867	阿蘇山噴火
828	平安京大地震	868	播磨国大地震 屋舎多数転倒
829	平安京大地震	869	陸奥国大地震 屋舎多数転倒・津波
830	秋田大地震 秋田城屋舎多数転倒		肥後国大地震 屋舎多数転倒・津波
837	鳴子地震 火山噴火・温泉流出	880	出雲国大地震 社寺民家多数転倒
841	伊豆国大地震 特使派遣	881	平安京大地震 大極殿・築地転倒
850	出羽国大地震 国府被害。津波	887	諸国大地震 駿河南海トラフ・津波
856	平安京大地震 屋舎多数転倒		伊豆国大地震 新生島図を進上

9世紀に頻発した地震のなかでも、貞観の陸奥国大地震は最大のものであった。

【貞観11年（869）の大地震の様相】『日本三代実録』五月廿六日条（現暦7月9日）

「陸奥国、地大いに震え動き、①流光昼の如く隠映す。頃の人民呼び叫び、伏して起つ能はず。或は屋仆れて圧死し、或は裂けて埋れ死ぬ。馬牛は駭き奔り、或は相昇る。城の倉庫・門・櫓・墻壁は頽落し、②転覆するものその数を知らず。海口は咆哮し、声は雷霆に似る。驚涛は涌潮し、沂迴漲長して、忽ち城下に至る。海を去ること③数十百里、浩々としてその水岸を分け得ず。原野道路総て滄溟となり、船に乗るに違あらず。山に登るも及び難く、④溺死する者千許り、資産苗稼、ほとんど遺すことなし」。

解説：①発光現象から夜半に起こった地震であったことを知る

②震災を受けたのは多賀城Ⅲ期の建物群と城下の古代都市域である。震災復興に使われた瓦から、被害は多賀城廃寺、陸奥国分寺、国分尼寺にも及んでいる。

③当時の1里は540m。数十里（≒5km）～百里（≒50km）とする解釈もある。

④古代都市域の住民。国司以下の上級役人、郡からの派遣役人、傭丁、兵士など1200人を越える人々が活動する場であった。

農作物も甚大な被害を受けた。

### 【中央政府への報告】

陸奥国府から太政官への震災報告が届いた月日は『日本三代実録』に記録がない。

参考になるのが、830年（天長7年）正月3日辰の刻（午前8時頃）に秋田城下で起こった大地震の報告である。鎮秋田城国司正六位上行介藤原朝臣行則からの被害状況報告は同日の酉の刻（午後6時頃）には酒田の出羽国府に到着。出羽国司は駅伝により、被害状況を奏上。正月廿八日には情報が太政官に届いている。陸奥国からの震災報告も1ヶ月程度と推定される。

780年3月22日勃発の伊治公菅麻呂の反乱では6日後の3月28日には報告が届いている。

### 【中央政府の対応】

①貞観11年9月7日に「従五位上行左衛門権佐兼因幡国権介紀春枝を正使、ほか副使2名」からなる「検陸奥国地震使」を陸奥国に派遣。

②10月13日の清和天皇の詔勅発布

- a. 使者の派遣
- b. 公民蝦夷への区別ない被害者救済
- c. 死者の埋葬
- d. 食料支給
- e. 租と調の免除など。

③陸奥国修理府の設置

貞観十二（870）年九月十五日条に、大宰府管内で綿を盗んだ新羅人のうち、10名を陸奥国に移住させ、そのうち造瓦の才に長じていた潤清、長焉、真平を陸奥国修理府に配し、瓦造を伝習をさせたとある。震災復興機関として陸奥国修理府が設置されていたことがわかる。

### 【修理府による多賀城復興】

〔政 庁〕Ⅳ期1小期の遺構である。後殿（震災直後は掘立柱建物、間もなく礎石建物で再建）、東楼、西楼を礎石建物で再建。正殿、東脇殿、西脇殿は瓦の葺き替え。

Ⅳ期2小期には北西に一郭を加え、後殿後方東西に1棟の掘立柱建物が配置される。

〔曹 司〕城前、作貫、大畑、六月坂、五万崎地区で復興。

〔外郭施設〕最も大きな被害を受ける。材木堀、門の新設。築地の再構築が各所で行われた。

〔城下都市〕道路網が最も整備される。千刈田、多賀前南、多賀前北地区の国司館も前代に比べて一段と整備され、律令祭祀も盛んに行われた。国府の境界とみられる東の井戸尻地区、西の東町浦地区出土の万灯会使用一括土器は9世紀末から10世紀のもの。

### 【修理府による瓦生産】

震災復興用の瓦は仙台市台原・小田原丘陵窯跡群と利府町春日・大沢瓦窯跡群で生産された。

前代Ⅲ期に使用した箆を再利用して、細弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦が仙台市と利府町の両者の窯で生産されている。台原窯跡群では平安宮瓦を生産したロストル式平窯も採用され、京都の技術者も参画していたことを知る。また、小田原窯跡群では新羅系文様の宝相華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦が新たに生産され、多賀城と付属寺院、陸奥国分寺、同尼寺の修復に使用された。

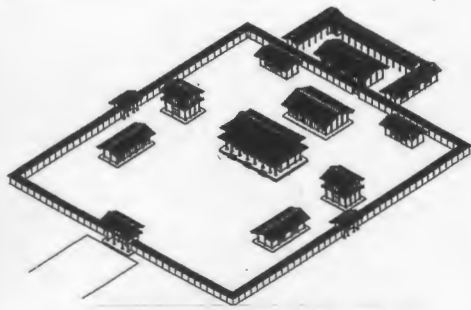


図1 多賀城Ⅳ期の政庁

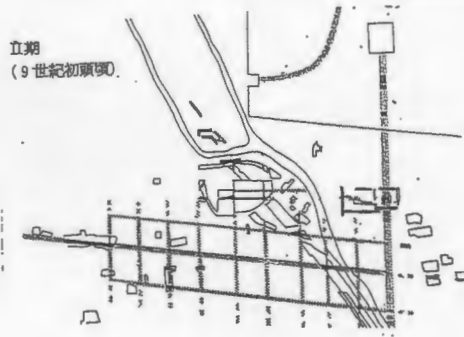


図4 古代都市多賀城 (左: 震災前 右: 復興後)

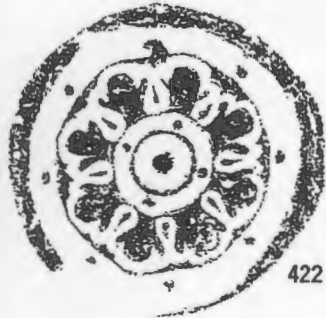
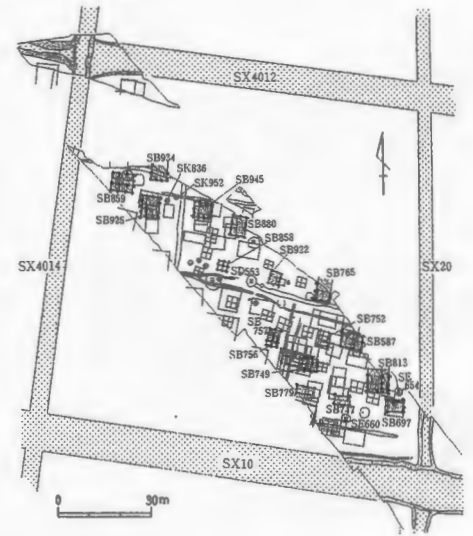
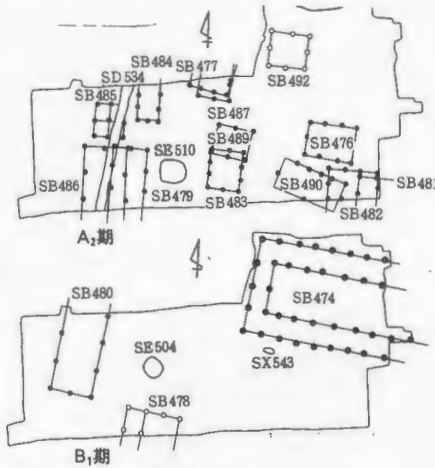
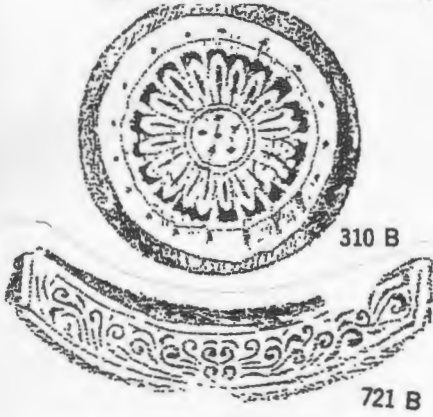
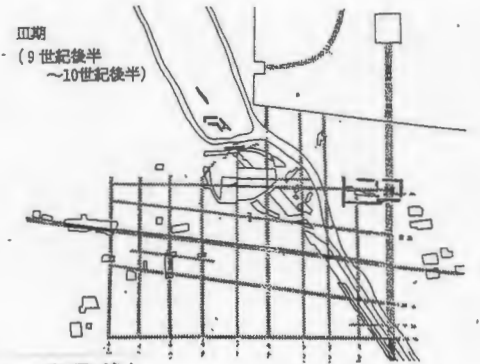


図5 都市内の国司館

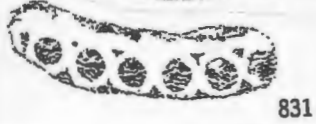
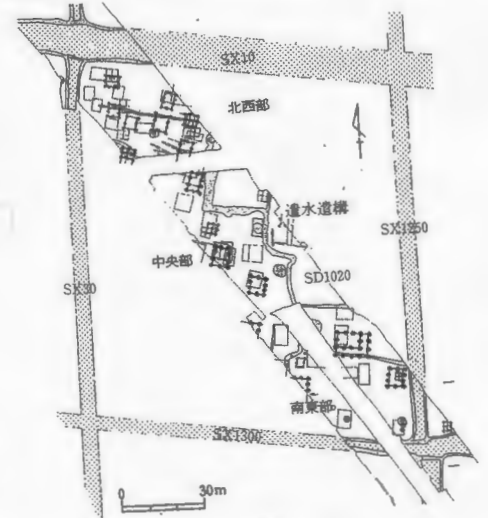
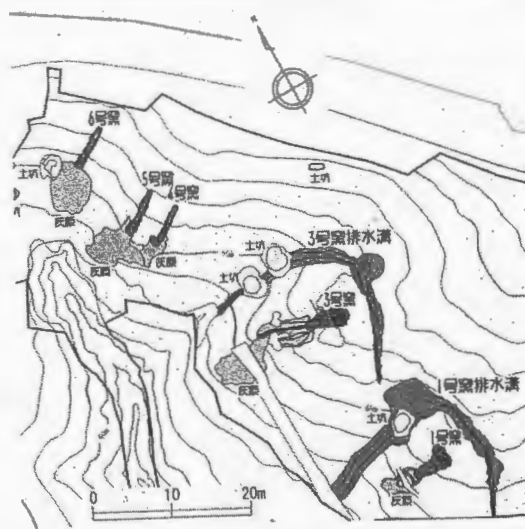
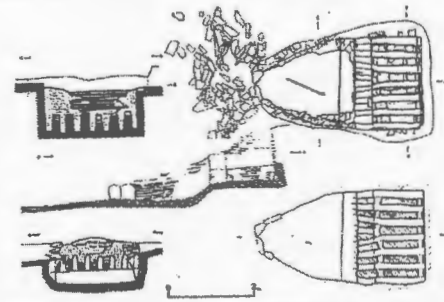


図2 Ⅳ期の軒瓦



仙台市与兵衛沼窯跡



吉志部瓦窯跡 (大阪府吹田市)

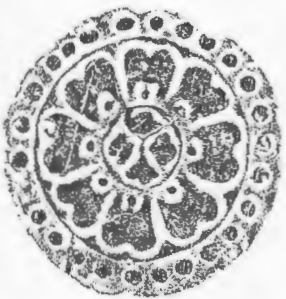


図3 太宰府天満宮の軒丸瓦

図6 ロストル付き平窯